



International School インターナショナルスクールにおける教育について

会員 今出川 幸寛 <31期>

外国人との間の子を「ハーフ」というのは誤りで、正確には「ダブル」である。なぜなら、通常は両方の言語を使いこなし、両方の文化の中で養育看護されているからである。私と妻（美術教師・ウェールズ人）の子どもがダブルで、しかも2人いる。

長男は、家で英語、外で日本語を覚え、日本の幼稚園、区立小・中学校を卒業し、義務教育を終了した。

妻の強い勧めで、彼は、卒業間近に、英語能力をみるテストと面接を受け、上野毛のセント・メリーズ・インターナショナル・スクールに入学した。復活祭の明けた4月1日から通学し始めたが、同校の新学年が9月のため、彼は、9年生（中学3年）に編入された。その日以後、彼は、毎日、筋トレでもしているかのように大きな重いバッグを背負って通っている。

彼が、最初に持ち帰った世界史の宿題は、「第一次大戦勃発の原因として、Aは別紙1の意見を、Bは別紙2の意見を発表している。Aは冷戦時代を、Bは世界大恐慌時代を生きた人である。A、Bの考え方の類似点、相違点と、それぞれが生きた時代とはどんな関係があるか、を考え、A4判のレポート用紙1枚にまとめて提出せよ」というもので、AとBの論文の抜粋が付されていた。これが中学3年生の歴史？と驚いた。年号を覚えるとか、正解はどれか、を求めるものではない。一般化すれば、A意見の理解にあたり、Aの背景にも思いを致す課題である。どんな事象でも、見る人の立場・関心が異なれば、違った面が見えるのであって、一方が正しければ他方は誤りである、とはいえない。相対的にものを考えることを課すテーマである。これは、生徒の国籍（文化）が多彩である中では、むしろ、自然と身につくことかもしれない。

なお、この課題を考える場合、世界大恐慌の時代、冷戦時代および第一次世界大戦前後の情報を必要と

するが、そのためには、分厚いハードカバーの教科書と補足的な資料が用意されている（このような教科書が数冊通学用バッグに入っているため、毎日筋トレである）。必要と感じれば、自分で別の書物やインターネットから情報を得てもよい。これらは、いずれも、課題について考えるために必要な情報なのであって、記憶するための情報ではない、という位置付けである。

妻の強い勧めと私の積極的同調により、長女は、義務教育を終えず、区立小学校卒業時に、清泉インターナショナルスクールの試験と面接を受け、6年生第4クォーターに編入した。

現在、8年生（中学2年生）の第4クォーターであるが、先日、彼女がインターネットで長屋の間取りを入手し、カラー印刷していたので、なにかと見てみたら、宿題の検討中で、その課題は、次のようなものであった。

「江戸時代の長屋と現代のアパート（マンションであったか？）の類似点と相違点、その相違点がもたらす生活様式、生活習慣の違い」

◆ ◆ ◆
このように、いずれの学校においても、与えられたテーマにつき自分が調査し考えたことを、授業ではそれぞれが発表して意見を述べ合うという方式をとるが、クラスの中で意見はそれこそさまざまであるという。

このような授業で生徒が身につける「力」と日本の教育制度の中で求められる「学力」は、明らかに違っているから、その優劣を比較することはできない。しかし、インターナショナルスクール卒業生の方が、人として身につけるべきことを、授業の中で、既に充分訓練してきているといえるであろう。